

CSW 体験記：ニューヨーク国連本部での“エンパワメント”の陰で

<CSW の会場で「日本人」でいること>

国連女性の地位委員会（CSW）の会期中、あるサイドイベントで私が「日本から来ました」と自己紹介すると、イベント後、ある女性が近づいてきてこう言い放った。「イギリスに移住したとき、レイシズムに顔をパンチされた。でも日本に移住したとき、レイシズムだけでなく、セクシズムにも顔をパンチされた。」彼女は数年前に上智大学に交換留学した際、日本での悍ましいジェンダー不平等の現実に入り、皮肉なことに日本のジェンダー意識の「欠如」に「インスパイア」され、“Super Smash Hoes”という日本のジェンダー問題の批評をするポッドキャストを始めた¹。CSW の会場で「日本から来ました」と言うと、彼女以外からも「日本の“Chikan”についてよくネット記事で読むよ」「日本で盗撮に使われるスパイカメラについて私たちのサイドイベントで話してほしい」「日本の iPhone だけ盗撮防止のためにシャッター音が鳴るってほんと？」と世界中の人から日本のジェンダー意識の欠如に関するコメントをもらった。情けないところから来てしまったなと思うと同時に、外圧に弱い日本がこうして海外の活動家に注目されていることは希望の光のようにも感じられた。

<ジェンダー意識の芽生え>

私が CSW への参加を決める以前に、そもそもジェンダー自体に関心を抱いたのは、こうした日本の悲しい現実を反映したコメントとも関連する。最初にジェンダーを意識したのは6歳の頃だった。私は日本の公立の小学校に入学する1週間前に中国上海から本帰国した。上海ではインターナショナルスクールに通い「髪の毛を爆発させて登校する日」「両足違う靴下を履いて登校する日」など変な格好をして登校するイベントがあり、自由な校風だった。日本の公立小学校ではそのようなイベントはなく、理不尽な校則も多く、窮屈に感じるが多かった。その居心地の悪さの一発目は、小学校の入学式での出来事だった。入学式の写真撮影の際、カメラマンから「男の子は足を肩幅に広げて、手を拳にして～。女の子はお膝閉じて、両手揃えて座ってな～」と指示された。当時、私はまだ6歳で当然「ジェンダー」という言葉は知らなかったが「なんで女の子と男の子で違うポーズするんだろう？」と漠然と疑問に思ったことを覚えている。

その後はあまりジェンダーを意識することはなかった。しかし高校3年生のとき、同じ学年の男子生徒数名が学校のプールの女子更衣室にボールペン型のカメラを設置し盗撮していたことが発覚した。クラスメートが私たちの裸の姿を盗撮したという事実に衝撃を覚え、心がえぐられただけでなく、ボールペン型の小型隠しカメラをいとも簡単に誰でも Amazon で入手できてしまうデジタル時代の驚異的な利便性、警察の無力さ、日本における性犯罪に関する法の欠如や抜け穴の多さに愕然とした。

大学生になってから、親戚の男性に「最近大学で面白い授業あった？」と聞かれ「文化人類学の授業でジェンダーの社会的構築について習ったよ」と話すと「あー、ジェンダーは興味ない。他は？」と遮られた。私はこう言われた瞬間、ぐわっと頭に血が上ったことが分かった。私にとって「ジェンダー」というものは、どれだけ考えたくなくても、意識してしまうものだ。彼はその後「日本にジェンダー不平等なんてないやろ。じゃあ例えば何があるんや？」と続けた。一

¹ Budhwani, Fahreen (2022) “Super Smash Hoes” <https://www.supersmashhoesmedia.com/the-podcast>
Accessed: May 1st, 2023

度、ジェンダーの視点を知ってしまうと、自分の生活の全てのものをジェンダーのレンズでしか解析できなくなった。

『中居正広の金曜日のスマイルたちへ』（金スマ）というバラエティ番組では、赤い服を身に纏い、足を組み、全く同じ姿勢を保ち、一言も話さずただ微笑むだけが役割の女性たちがコロナ禍でも何十人も背景に並べられていた。『7つの海を楽しもう!世界さまぁ〜リゾート』という深夜番組では、リゾートを紹介するリポーターはいつも若い女性で肌の露出が多いビキニを着ている。

大阪の中心地を歩いていると「ねえちゃん、ちょっとどう?」と「パパ活」ならぬ「ジジ活」をする70代ぐらいの男性が声をかけてくる。「この場所探してるんやけど」と道に迷っているように見えた男性に道案内をしようとする、突然腕を捕まれ脅された。「助けて!」と叫びたかったが、恐怖で体が硬直し声が出なかった。

1年の育休を取得した叔母の夫に対し、親戚は「旦那に甘えとったらあかんで」と叔母に言い放った。別の親戚は4歳の従兄弟に「男の子は泣かないの」と教科書から取り出してきたかのようなジェンダーロールを押し付けた。

「日本にジェンダー不平等なんてないやろ。じゃあ例えば何があるんや?」という親戚の問いには無限に回答できた。こうしたモヤモヤ感や恐怖がわんこそばのように毎日毎日次から次へと降ってくる中で、彼がジェンダーについて「興味ない」の一言で片付けられてしまうことは、彼がこれまでの人生でジェンダーによる不利益を経験したことがない特権の表れであると感じた。その瞬間はこれまでの怒りや虚しさ、悲しさで張り詰めていた糸がぶつんと切れ、ただ静かに涙を流すことしかできなかった。しかし、後で冷静になって考えてみると「ジェンダーは興味ない」と言った彼も、いつも怒鳴ることでは強さを誇示できず、どのような場でも権威を見せつけなければならないという強迫観念の中で生きてきた家父長制の被害者であるのではないかと思いはじめた。だからといって、ジェンダー意識の欠如に基づく彼の日頃の言動が正当化されるわけではないが、怒りの矛先を彼だけに向けることは的違いだと感じるようになった。

その後、コロナ禍真っ最中だったが、カナダにあるブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)に1年間交換留学する機会に恵まれた。UBCには“Gender, Race, Sexuality, and Social Justice”という私の興味のあるもの全てを詰め込んだ学科があった²。この学科は自分のためにあるようなものだと思います。UBCへの留学を決めた。バンクーバーでは、アジア人に対するヘイトの攻撃対象となることは多かったが、ジェンダーという観点では非常に生きやすかった。日本には十数年住み、特にここ数年はジェンダーによる負の影響を考えずに生活できる日は少なかった。しかしバンクーバーでの1年間は、ジェンダーによる不利益を考えたのは、両手の指で数え切れる程度だった。大学の教員の女性比率が日本で通う大学と比べて圧倒的に高いこと、広告において痩せ型女性だけでなく、ふくよかな女性・車椅子利用者の女性・アジア系・黒人・ラテン系・ヒジャブを被った女性など様々な女性の表象があること、大学内で全く隠すことなく無料で生理用品が配置されていること。もちろん、カナダでも先住民族の女性への人権侵害や性加害などジェンダーにまつわる問題は山積するが、日本での経験と比べると、圧倒的に日常生活でエンパワーされるが多かった。

個人だけでなく社会構造や教育そのもののバイアスや不正義に切り込まなければ、ジェンダー不平等は解決しないことをカナダ留学での実体験から強く感じるようになった。そのため、NWECフォーラムで広告におけるアンコンシャス・バイアスについて考えるワークショップをYWCAインターンとして実施したり、UBC留学中はジェンダー学と開発学を専門とするレオノラ・アンジェルス教授のもとでリサーチ・アシスタントをしたり、バンクーバーにあるInclusive Excellence Strategy Solutions Inc.というEDI(Equity, Diversity, Inclusion)のコンサルティング・

² University of British Columbia (n.d.) “Institute for Gender, Race, Sexuality, and Social Justice”
<https://grsj.arts.ubc.ca/> Accessed: May 1st, 2023

ファームで働いてみたり、社会構造における不平等の是正やジェンダー平等に関わる仕事をいくつかしてみた。

<CSWに参加するきっかけ>

そんな中、日本で通う大学での「国連・外交入門」という講義で、担当教員だった三輪敦子先生が偶然 JAWW のユースレポーター制度についてクラス全体にアナウンスしてくださった。それをきっかけに「なんか面白そう」という純粋な好奇心で JAWW のユースレポーターに応募した。応募締め切り日はちょうどクリスマス・イブで、大学の期末レポート課題が山積していたため、応募書類は締め切りの数時間前に提出するというあまり理想的ではない状況だった。そのため、ユースレポーターに選ばれたとの連絡をいただいたときは「わあ、まさか」と驚き、嬉しかった。JAWW ユースレポーターの面接選考は非常に和やかな雰囲気、私がこれまでに受けてきた他の機関の圧迫面接とは全く違った。面接の過程においても、一人間として尊重されていることを強く感じられた。

その後、日本政府代表団のユース代表にも選出していただいた。幼稚園時代、上海に住んでいた頃に、両手足を切断された年老いた物乞いが凍えながら路上で座っている様子や、どこからか借りてきた赤ん坊を餌に物乞いをする女性の姿が脳裏に焼き付き、小学 2 年生の頃『しょう来のゆめ』と題した作文では「まずしい人をすくいたい」と書いていた（今考えると「貧しい人を救う」という思考自体が非常に上から目線で現実を分かっていないなと自分自身を批判したい思いでいっぱいだ）。小学校 5 年生の頃にはジュネーブとニューヨークの国連本部に家族でわざわざ訪れるほど、国連に強い関心を抱いており、小学校の卒業文集には「国連で働くことが将来の夢」と綴っていた。高校時代は模擬国連にエチオピア大使として参加し、大学では国連・外交プログラムを副専攻にし、国連外交サークルに所属し、UNDP 学生大使を務める、という国連づくしの生活を送ってきた。

そのため、今回ニューヨークの国連本部で日本政府代表団のユース代表として発言できたときには、何とも言えない不思議な感慨深さがあった。幼稚園の頃から成績表には常に「あなたはシャイすぎる」と書かれ、授業参観の後は親に「なんで全然発言しないの？」といつも言われ続けてきた私にとって、国連という場で発言するということは、自分で言うのもなんだが、成長の証のように感じられた。



Youth Interactive Dialogue にて
日本政府代表団ユース代表として演説

<CSW で実感した排他性：暗示的・明示的な大国・西洋中心主義>

そのような思いを抱えて参加した CSW では、ジェンダー平等という共通目的のために連帯する数千人が一堂に会したことに希望を感じる一方、多くのフラストレーションもあった。CSW は他の多くの国際会議と比較すると、かなり多様な属性の人が参加していた。しかし、最も周縁化された人々は会場にいなかった。「誰 1 人取り残さない社会の実現」を掲げる国連の議場内においても「誰 1 人取り残さない」状態からは程遠かった。政治的意見を表明したり、「ジェンダー平等」という言葉を口にしたりするだけで迫害される恐れのある人の意見はニューヨークでは代表されない。また、アメリカと敵対する国のパスポートを持っているためにアメリカに入国するためのビザが降りず、そもそもニューヨークに渡航できない人も続出していた。

ニューヨークだけの開催では、このように議論から取り残される人が多くいることから、CSW をグローバルサウスでも開催すべきとの意見が目立った。これは他人事ではないと感じた。私は、現在日本における難民・外国人労働者の支援団体に所属している。今、日本では入管法の「改正」案が強行採決されようとしている。難民認定申請中の仮放免者は日本での在留資格を与えられておらず、そもそも居住している都道府県外に出ることすら制限されている。ある国や地域で最も脆弱な立場におかれている人は、そもそもニューヨークに行くことすらできない。つまり、ニューヨークの会合に参加できること自体が大きな特権だ。欠席者の声を「代弁」したり、政治的な動機により参加を阻まれた人がいるという事実を「認識」したりすることはこれまで何十年もなされ続けてきた。しかし、それで満足するのではなく、そうした人が100%のキャンパシで参画できるように制度を改革しなければならないフェーズに来ている。

また、CSW の議場には、経済社会理事会との協議資格を持つ NGO しか入れないが、そもそも協議資格を持つ NGO になるための審査基準も排他性を孕み、公正なものとは言えない³。こうした国連に存在する構造的な排除体制の変革も求められる。

今回の CSW の交渉では「SRHR（性と生殖に関する健康と権利）」「外国の占領下におけるジェンダーに基づく暴力」「LGBTQ+」に関連する表現などが物議を醸していた。結果的に、パレスチナなど外国の占領下にある地域の女性やLGBTQ+の権利保障に関する文言の多くが削除されてしまったことは、特定の国のエゴイズムにより、多様なアイデンティティを持つ人が人為的に存在しないことにされている現状を反映している。

<周縁化された人々のマッチョ化>

CSW の中盤ごろ、UN Women がユースのためのメンタルヘルスケアのイベントを開催し、そこで何人もが涙を流しながら、CSW 中に感じた不安や無力感、怒りを共有してくれた。

LGBTQ+のアドボカシーをする NGO の代表としてメキシコから参加していた友人は、英語を母語として話さないために、英語母語話者が主導する議論から取り残されていると感じ、さらにトランスジェンダーであることを理由に「女性ではないから参加資格はない」と他の会議参加者に言われたことも話してくれた。彼女はどのように侮辱的なことを言われても応答の言葉が咄嗟に出てこないことなどから、如何に国連の会議が英語話者に有利な場であるかを批判していた。

ユースのフラストレーションは特に大きかった。Youth Interactive Dialogue ですら、50代ぐらに見える明らかに「ユース」ではない官僚が発言する様子が見られたり、ユースの会合と同時時間帯に国連事務総長との対話イベントが開催されたことにより多くの人の関心がそちらに向いたりするなど、意識的・無意識的にユースの場が大人に占領されたり軽視されたりしていた。政府や国連機関の SNS でのアピールのためだけにユースがトークンのように利用される一方で、肝心の意見交換の時間は異様に短いことに対し、怒りや無力感に襲われるユースも多かった。

こうしたユースの存在の矮小化の結果、大人と対等な立場で議論できるよう、過剰に理論武装したり、背伸びしたりするユースの「マッチョ化」現象が見られる。ユースに限らず脆弱な立場におかれた人がマッチョ化してしまう要因は、そもそも脆弱な立場におかれた人に優しくないシステムで「活躍」「成功」するには、優しくないシステムの文化に無理矢理にでも適合する必要があるためだ。結局は既に社会的・経済的に力があり、そうした既存のシステムに最適化できる人だけがユース代表として選出される構造であるため、必然的に強人化しなければならない。"Anyone can do anything"「誰でも努力すれば報われる」と希望を持たせようとする人もいるが、それは現実社会における能力主義や経済・社会的格差によって引き起こされる不平等を矮小化する言葉だ。

CSW 最終日は、終了予定時間の午後6時を大幅に過ぎ、明朝の午前3時27分に漸く合意結論に至った。真夜中の国連では、ある国の代表団が皆のためにピザをオーダーしたり、「こりゃあ

³ Inboden, Rana (2021) "China at the UN: Choking Civil Society" *Journal of Democracy*, 32(3), pp.124-135

ワインが必要だな」と半分冗談、半分本気で話している人がいたり、なんとか集中力を保とうと必死の様子が伝わってきた。1日20時間以上にわたる会合に出席した人には敬意を表したいが、こうした長時間にわたる会議を「がんばりの証」と美化する風潮は変わらなければならない。家に帰ってケア労働をしなければならない人や身体的な障害があり長時間座ってられない人は、20時間も会議が続いたり、深夜まで会議が延長されたりすると退席しなければならないため、暗的に議論から排除される。国連の会議では同時手話通訳・字幕再生などの面ではインクルーシブであることが意識されていたが、会議室内からは見えにくい社会的な障害やバリアに対してはまだまだ改善しなければならないことがある。真の意味で「多様性」「包摂」「公正」などを実現するためには、弱者が強者にならずとも参画できる必要がある。女性やユース、障害者や移民などこれまで意思決定のテーブルから排除され続けてきた人々がテーブルにつけば問題が解決するわけではない。そもそもテーブルの破壊、つまり現状の不均衡な議論のシステムの破壊も必要だ。ユースに限ら



合意結論に至った午前3時27分：
ユース・アクティビストたちと

ず、ジェンダーに基づくアファーマティブ・アクションに関しても、数だけを増やしたところで、それは不正義のシステムに周縁化された人を包摂しただけで、不正義のシステムをより強化するのみだ。そうではなく、制度や組織などを根本から改革しなければならない。ただテーブルで席を与えるだけの“Add-on”や鎮痛剤的アプローチではなく、参加者の応募・選出・政策提言・意思決定・実施・モニタリング・フィードバックなど全行程において、これまで排除され続けてきた人が安心して参画できるよう、構造的・心理的バリアが取り除かれ、対等に扱われ、アウトプットに含まれる必要がある。

<ユースの公正>

これまで日本で生きてきた中で感じてきたジェンダー関連の怒りや悲しみが大きな原動力となり、借金をしてでもCSWに行きたいという強い思いがあった。そのため、私は渡航滞在費何十万円という額を自己負担してCSWに参加した。しかし、それでは毎年参加することは困難で持続可能ではない。また、このように大枚をはたける人しかユース代表になれない構造は排他的で、既にある社会・経済的要因による不平等の構造を維持しているにすぎない。

西欧諸国のユース代表は、渡航滞在費を政府がほぼ全額負担してくれていると話していた。その上で、CSWに出席する間の「賃金」が支払われていないことを批判していた。ユースによる政治参画を持続可能なものにするには、金銭的な支援が不可欠だ。しかし、今回はEU諸国やその他西欧先進国をはじめとする20数か国しか政府代表団としてユース代表を派遣していなかった。残りの約180か国は政府代表団にユース代表を含めていなかった。つまり、そもそもユース代表制度がない国がマジョリティである。しかし、ユースを政府代表団に入れていない、もしくはユースを入れたくないと考えている国のユースこそ、国連で訴えたいことがあるのではないだろうか。ユース代表制度が、既に国際社会で権威を振るう西洋中心主義をさらに増強する制度になら

ないためにも、ユースが国際会議において対等な存在として扱われるための集団的なロビイングを可能にするためにも、ユース代表制度をより広範の国に広げていく必要がある。

ユースの声をより公平に代表できるユース代表制度にするためには、そもそもユース代表の選出方法が変わらなければならない。今回、私が日本政府代表団のユース代表に選出された選考基準は明示されていないため、なぜ選ばれたのか分からない。しかし、例えばデンマークでは、国内の約80のユース主導団体で構成されたユース議会の議員が、CSWに政府代表団の一員として派遣するユース代表を選出する⁴。つまり「ユース代表」が「ユース」によって選出されるという民主的なプロセスを踏んでいる。デンマークのユース議会によるユース代表の選出は”Nothing about us, without us”「私たち抜きに私たちのことを決めるな」という精神を体現している。また、ドイツのユース代表は移民2世であったり、他国のユース代表の多くがLGBTQ+を公言している人であったりするなど、多様なユースが政府代表団の一員になっていた。

周縁化されてきたユースの声を代表する枠組みを強化するためにユースを政府代表団の中に含めることが国連から推奨されている以上、既に社会的な特権を持っているユースや政権に擦り寄るユースではなく、純粋にユースの訴えを代表するためのユース代表でなければならない。そのためには、ユースにオーナーシップを与える、透明性のあるユース代表選出プロセスが実現されるべきだ。

同時に、ユースの声が強調されるあまり、高齢者が特にデジタル時代においては取り残されている。ユースの場さえ確保すれば良いのではなく、少子化・高齢化が進む日本だからこそ、ユース・高齢者、両者の分断を防ぐには、インタージェネレーションな対話・協力の場が必要だ。

<今後の課題>

CSWへの参加はあくまで通過点であり、CSWでの経験を今後どのように生かしていくかが最も重要だ。CSWの一番の問題は前述した通り、ニューヨークの国連本部では「最も周縁化された人々」が不在だったことだ。CSW67のサブテーマの「農村女性のエンパワメント」についての議論の際「農村女性はどこにいるのか。会議室にいないじゃないか」「今日を生きるための食べ物すらないのに、なぜWiFiへのアクセスについて議論しているのか。我々の優先順位は先進国と異なる」という声は特にグローバルサウスから上がった。これらの声を聞き、今年8月、東ティモールにフィールドワークに行くことにした。東ティモールは後発開発途上国に分類され、2002年に独立したばかりの「アジアで最も若い国」である。ニューヨークの国連本部には来られない人やそもそもCSWの存在すら知らない人がどのような考えを持ち、どのような生活を送っているのか直接見て聞いて学ぶために、グローバルサウスの中でも貧しい国に行く必要があると考えた。



International Women's Day :

各国政府代表団ユース代表と国連総会ホールで

⁴ Danish Youth Council (n.d.) “About DUF” <https://en.duf.dk/about-duf> Accessed: May 1st, 2023

ニューヨーク滞在中は、MoMAに「母親用」ではなく「親用」と書かれた授乳室があったこと、セントラルパークでは2020年に初めて実在の「女性」の像が設置されたこと、安全が考慮されたジェンダーフリーのトイレがあることなど、ポジティブな発見も多かった。一方、キャットコールを1日数回は受けるなど、ジェンダー平等という観点ではまだまだと感じる点も多かった。

日本では、緊急避妊薬の市販化に関するパブリックコメントに4万件以上の意見が集まり、そのうち97%が「賛成」の声だった。1mmずつではあるが、少しずつ前進している希望を感じる。一方、ジェンダー平等や人権に関する事項がまだまだ「検討」の段階にお

かかれている実態もある。人権を保障するかどうか、差別をしないかは交渉の余地があるものではなく、本来は「検討」すべき議題ではないはずだ。CSWで出会った、迫害を逃れてきた活動家たちは「ジェンダー平等や社会的正義に関する運動は趣味や贅沢と誤解されがちだが、私たちの運動は趣味でも贅沢でもない。人生がかかっているのだ」と話していた。

女性がエンパワーされる環境が醸成されつつある一方、ジェンダー平等において男性の参画をどう促進するかについては課題が残る。今回のCSWにおいても、参加者のマジョリティは女性だった。“When you're accustomed to privilege, equality feels like oppression”「特権に慣れていると、平等が抑圧のように感じる」と言われるように、ジェンダー平等に向けての運動の中で、男性が感じる不安や恐怖が除去されなければ、社会的分断が加速する。アメリカや日本を含む多くの国々で、フェミニズムへのバックラッシュが激化している。また社会的正義のために闘う人を揶揄する“Social Justice Warriors”「社会正義戦士」という蔑称もある。なぜ“Social Justice Warriors”やフェミニストが一部の人から蔑視される対象となったのか、その根本要因に対処しなければならない。

CSWのユースフォーラムで、一人のパネリストが「ミソジニストは、ジェンダー平等によって女の帝国ができることを恐れている。しかし、私たちインターセクショナル・フェミニストは、新しい資本家でも、家父長制でも、帝国主義者でもない」と主張した。私が支持するフェミニズムは一部のアンチフェミニストが恐れる、女性が新たな抑圧者や搾取者になり、新たに抑圧されたり搾取されたりする集団を作る運動ではなく、抑圧・搾取・差別の構造を解体し、ノンバイナリー・女・男を含む全ての人を抑圧・搾取・差別から解放する運動だ。

<謝辞>

CSWでの経験やそこで感じたことについて語り始めると、紙が何枚あっても足りないのでも、そろそろ筆をおこうと思う。そもそもJAWWの存在を教えてくださいました、私の大学の教員である三輪敦子先生、CSW期間中ニューヨークで同じホテルの部屋に宿泊し、朝から晩までジェンダーにまつわる知識を注入して下さったチャタリングで素晴らしいお姉様方・研究者・活動家の皆様、メーリングリストで発信した報告に対し励みの言葉をかけて下さったJAWW会員の皆様、日本からいつもサポートして下さった鴨澤さんをはじめとするJAWW役員の皆様、現地でサポートして下さった日本代表団の皆様、ユースレポーターの同期のお二人、ニューヨークで出会った各国政府代表団のユース代表や一生懸命闘う活動家である沢山の新しい友達、帰りの飛行機にうっかり乗り遅れたときに無料で3日間泊めてくれたスイス政府代表団のユース代表、経済的な理由やビザ取得の困難さ・身体的障害などを理由にニューヨークには渡航できなかった



MoMAにて「母親用」ではなく「親用」の授乳室

が、LINE やインスタグラムなどを通じ CSW で訴えたいメッセージを共有してくれた数多くの友人、そしてこのとてつもなく長い報告書を最後まで読んでくださった方々に感謝したい。

ニューヨークでは、ジェンダー平等の実現のためにあらゆる勢力と闘う、数えきれない仲間に出会い、世界にはこれだけ頑張っている人が大勢いるのだと驚くと同時に勇気づけられた。相互に連帯し、戦略的に集合的に力を結集させ社会変容をもたらす仲間と出会えたことが CSW67 に参加した一番の財産だ。日本で受けてきたジェンダーに基づく理不尽な体験への怒りや悲しみを上書きできるほどのパワフルなエネルギーを CSW で沢山の人から受け取ることができた。

これまで日本におけるジェンダー平等の実現のために先駆者となり、あらゆる属性の人がより生きやすい社会のための道を切り拓いてくださった大先輩の闘いがあったからこそ、今、私たち若者は数十年前と比べると、かなり自由にジェンダーに関する発言ができています。大先輩のご尽力を無下にしないよう、これからも先輩世代・同世代・後輩世代と協働しながら、精一杯努力し続けたい。

私は借金をしてでも CSW に参加したいと思うほど、日本でのジェンダー不平等に苛立ちを覚えていた。今後は、経済的に恵まれないユースも国際会議に参加できるよう、政府などがユースを資金的に援助することを願う。同時に、何千ドルを自己負担してまでもジェンダー平等のための国際会議に参加したいと思うほど、ジェンダーに基づく不正義に失望する子どもが将来的にはいなくなることを願いたい。



2023年5月1日

草薙柚季

JAWW ユースレポーター・CSW67 日本政府代表団ユース代表